

説教「わたしのくびきを負え」

エレミヤ書 6 章 16 節 a、マタイによる福音書 11 章 25～30 節（口語訳聖書）

1973.5.20

日本バプテスト同盟 関東学院教会

私たちは現代社会における複雑な人間関係の中で自分に与えられた人生を歩んでいるわけですが、生涯の間にいろいろな人々と関係を持ちます。その中でイエスは、「私と関係を持つ人生を歩め」と呼びかけてくださっています。今朝は、イエスのこの招きの言葉を中心に考えてみたいと思います。

先ほど読んでいただきましたところの後半の「すべて重荷を負うて・・・」で始まるマタイ 11 章 28 節以下は、マタイ福音書だけに伝わるイエスの呼びかけの言葉です。それは、すべてが「わたし」に関わり、「わたし」に集中して語られています。日本語聖書では 28 節後半の「あなたがたを休ませてあげよう」の主語が略されていますが、原典には「わたしは」があります。それを数に入れると、28 節以下の 3 節の間に、「わたしは」「わたしに」「わたしの」という語が合わせて 7 回出てまいります。私たちに呼びかけてくる主体である「わたし」がこのように繰り返し強調される理由は何でしょうか。すぐ前の 25～27 節に、この問いに対する答えを求めるといえると思います。それは、2つの点においてです。

一つは 25～26 節で、「天地の^{しゆ}主なる父よ」（25）で始まる イエスの賛美の祈りの言葉に示されています。すなわち、神はその御旨^{みむね}を知恵ある者や賢い者に隠し、彼らには示さずに「幼^{おき}な子^ごにあらわされた」（同）と言われている事実です。そして 26 節で、イエスはその事実を、「父よ、これはまことにみこころにかなった事でした」と言っておられます。イエスの語るところに、当時の知識層を代表する学者、パリサイ人^{びと}たちからは反応がなかった。それはむしろ、彼らから「地の民^{たみ}」「律法を知らない呪われた奴ら^{やつ}」と軽蔑されていた人々、単純な人々、素朴な人々に訴えかけた、ということです。山上^{さんじょう}の垂訓^{すいくん}の終わったとき、群衆が驚いたのは イエスが律法学者のようにではなく権威ある者のように教えられたからだ、という言葉（マタイ 7：28～29）もこのことを暗示しています。しかし その一方で、今朝の箇所^{箇所}の直前の 20 節以下にありますように、コラジン、ベツサイダ、カペナウムといった イエスが精力的に宣教した地方は違っていた。これらの地方の人々に対し、イエスは「わざわざいだ」（21）と言われています。数々の力ある業がなされたにもかかわらず、彼らの内に悔い改めは起こらず、その反応が絶望的^{いえ}だったからです。預言者は自分の郷里や自分の家では尊敬されない、とイエスが嘆かれたのも この頃のことです。しかしながら イエスは、こうした

事態は正しいものであり、それが神の御旨であることを知って、絶望されません。「天地の主なる父よ、あなたをほめたたえます」と賛美しておられます。

では、イエスは どうして、それが神の御旨と知られたのでしょうか。それは、イエスが旧約聖書によく精通されていたと言われることにあります。例えば詩篇、イザヤ書、エレミヤ書から多く引用できますが、特にイザヤ書 29章 14節にこうあります。「それゆえ、見よ、わたしはこの民に、再び驚くべきわざを行う。それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は隠される」。神の知恵の広さ、深さは、人間の持つ知恵や知識の比ではないからです。実は、使徒パウロはこの箇所を引用して後、コリント人への第一の手紙 1章 21節で「この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている」と言い、さらに「神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うことをよしとされた」と述べています。イエスがここで言わんとされているところを、パウロは正しく受け継いでおります。そして、このことが旧約聖書に 遡る真理であることが分かるのです。

ガリラヤ地方に始まるイエスの言葉と業による宣教は ついに、その選ばれた弟子たちにさえ理解されませんでした。イエスの進まれた道は、彼らに逃げられ、裏切られ、捨てられた十字架への道であったのであります。知者、賢者に隠された神の御旨を啓示する このイエスこそ、神を啓示されるお方にほかなりません。人々に理解されない苦難の道を歩まれるイエスこそ、イザヤ書 53章の苦難の僕に示される、多くの人の重荷を負われるところの方です。旧約以来 イスラエルに負わされてきた歴史的課題を このような無類の仕方でも成し遂げられるお方であるがゆえに、「わたし」と言われるのです。それが、「わたしのもとにきなさい」（マタイ 11：28）と語りかけてくださる、その人です。

いま一つ、イエスが「わたし」を強調される理由は 27節に示されています。それは、神を知る者はイエスを除いてはいない、ということです。したがって、イエスによるほかに、神を十全に知る方法はないということになります。古今東西を通じて、これほどはっきりと「私以外に神に至る道はない」と言われた人がいるのでしょうか。神を啓示する唯一のお方、このイエスを通じてでなければ、神の御旨を知ることができない。なんという大胆な、排他的な宣言でしょうか。八百万の神々を呼んで助けを求めることに少しも不思議を感じないのが、私たち日本人の一般的な宗教感覚です。誰でもよい。何でもよい。私を助けてくれたなら、それが神様ということでしょう。また、それほどいわゆる御利益的でない場合であっても、一人の神、一つの神を信じるということに抵抗を感じるのです。富士の山に登る道は幾つかあっても、山頂から眺める月の一つではないか、というのが最も一般的な考えだからです。この道でもあの道でもよいではないか。真理は一つである。これは、否定しがたい日本人の心情と言えるでしょう。

実際、大学紛争中、若い神学者の中に見られたことですが、ナザレのイエスという一人の歴史的人物に神の真理が啓示されたとする そのようなキリスト教の信仰はどうしても狭くて排他的なものになり、伝道の障害になると考える人たちがおりました。ですから、このイエスという歴史的な枠をい

かに乗り越えるかということに懸命でした。そのようにして キリスト教の普遍的真理を強調したわけですが、その背後にはやはり、今述べたような日本人の宗教的心情も働いていたように思われます。つまり、ただ一人の歴史上の人物に排他的に自分のすべてを結びつけるというのは、日本人である私たちにとっては非常に狭い考えだと感じられるのです。そして、もっと広い大らかな考えを持って、すべてのものに窓を開いておこうとします。それにしても、イエスの呼びかけの言葉に照らしてみると、これはどういうことなのでしょう。

それは、「わたしのくびきを負え」（29）という その言葉から理解されるのではないのでしょうか。「わたしのくびきを負え」とは、そもそも、身を低め、身を^{かが}屈めて、このイエスという一人の方に身を結びつける、ということです。そして、身を屈めるというのは すなわち、私たち日本人の一見大らかに見えるそのような立場をやめて、まさに狭き道に入ることです。歴史のイエスに関わることなしに 神とか真理とかを議論することをやめる、ということ。そのようなイエスに自分を関わらせることが信仰であります。そのようにしてイエスと関わることに、神を知る道が開かれてくる。神の愛の深さ、広さ、大きさがどんなものか、イエスを通して知るようになるのです。イエスを離れては、それが十全にはできない、ということでもあります。父を知る者は、子と、子が父を啓示しようとして選んだ者（27）、すなわち そのくびきを負う者のほかにはないからです。

最後になりますが、では、イエスのくびきとは一体 何でしょうか。28節に「すべて重荷を負うて苦勞している者」とありますが、ここに言われる「重荷」とは 当時の状況から見ると、25節で「知恵のある者や賢い者」と言われている律法学者やパリサイ人^{びと}の教える律法とその解釈のことと言えます。それは、イエスが彼らを痛烈に批判して言われたマタイ 23章 4節の言葉からも分かります。イエスはそこで、彼らは「重い荷物をくくって 人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない」と言っておられます。事実、ユダヤ教では律法を「天国のくびき」と呼んで、これに従い、これを実行することを要求していました。イエスは、この律法の要求からイエスのくびきへと、人々を引き入れようとされたのでした。「わたしはあなたがたに休みを与えよう」（28、29）との約束は、律法のくびきからイエスのくびきへと、人々を解放することです。

であれば、イエスのくびきの特徴はどこにあるのか。イエス御自身が柔和で 心がへりくだっているから、そのくびきは負いやすく、その荷も軽い、というのです（29、30）。これは、イエスの新しい律法であります。律法学者の解釈による複雑で煩瑣^{はんさ}な律法の要求の重圧から解放され、イエスの愛の律法に従って生きるという、そういうくびきです。イエスのくびきは耐えがたい重荷ではなく、喜んで負ってゆくことのできるくびきであるのです。それは、イエスのくびきに^{つな}繋がれて 荷物を負わされるのですが、それが普通 考えるような重荷や苦痛ではなく、かえって それによって自分が救われ、解放され、自由になる、そんなくびきであるからです。留意したいのは、イエスがここで、「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい」（29）と言っておられることです。つまり、イエスのくびきに自分の心と行為とを従わせることによって何が^{みずか}起こるか、それを自ら経験してみなさい、ということではないのでしょうか。

現代の社会はいろいろな面において、自分を抑制したり、また他人から束縛されたりすることに耐えるのが難しくなっている時代と言えるでしょう。身勝手な自由とか権利とかはやたらに振り回されますが、自分が拘束されることには極めて消極的です。実際、例えば、赤子を産み捨てにすることというようなことも数多く起こっています。社会が物質的になり、快樂を追い求めることに走る。起こりうる結果を考慮したり、その責任を引き受けるといったことができなくなっていることの一つの現われと思われまゝ。先日 伝道所で聞いたことですが、名前は忘れましたが、孤児院があつて、そこに 小中学校の男女生徒合わせて 60 名ほどの孤児たちがいるそうです。ところが、そのうち 交通事故で両親を失ったという一人の子どもを除いて、ほかは全員、片親または両親がある子どもたちだけというのです。そうした実態を目にした伝道所の会員が語っていたのは、子を産み捨てる親など それまで信じられなかったが、それを見てからは そんなことも珍しくないんだ、ということでした。世の中には、こんな無責任な親も少なくないといひます。また、話によると、この孤児院の子が中学卒の時期になると、それまで子どものことでどんなに連絡しても返事もしなかった親が急にその時期に現われ、自分の子だと名乗り出てくるそうです。もちろん、中卒の子どもを働かせるために相違ありません。しかし、当の子どもは、そんな親のところには絶対に帰らない、と言うとのことでした。

無軌道な生活が広がりゆき、複雑な人間関係の中で生きてゆかねばならない今日の社会。そこにおいて新たな秩序を回復させるものとははたして、何でしょうか。古い時代の律法主義によらない、新しい律法。それではないか。「わたしのもとにきなさい」(28) と言われるイエスのくびぎに繋がって生きる生き方。それが求められているのではないのでしょうか。縛られることを嫌って、無軌道な欲望の虜になり、やがて身を滅ぼす道か、それとも くびぎを負うことによって、魂の平安と喜び、解放を経験するいのちの道か。このいずれかの分かれ道に立っているように思ひます。エレミヤ書 6章 16節で、預言者も次のように語っています。「主はこう言われる。『・・・昔からの道に問いかけてみよ。どれが幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ』」。そして、これに対する答えがイエスによって与えられたのであります。「わたしのくびぎを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」と。イエスが今日も我々に呼びかけ招いておられる この古くて新しい道を、自由な決断をもって選び取る者となってゆきたいものです。